令和元年度　学校自己評価の取組の総括

令和２年３月２５日

Ⅰ　評価シートにおける年度末達成状況（結果・考察）

Ⅰ	**①進んで学習に取り組む子**	１　教員による観察の評価では、２学期と比較して０．５ポイント上昇した。また、児童への質問紙調査では、「ア：よくできる　イ：できる」と回答する児童が増え、「ウ：あまりできない　エ：できない」と回答する児童が減少した。これらの結果から、６年間を見通した具体的な目標・評価基準の具体的な手立てを各学年で行う取組は効果的であったと考えられる。今年度は具体的な取組内容を学年の枠を越えて交流する機会が取れなかったため、次年度は１学期中に目標の掲示と具体的な手立ての検討を行い、２学期には手立てを実行できるように進めていく必要がある。 ２　児童が、成長とともに筋力が発達したことに加え、日々の体育授業や休み時間などで体を十分動かしたことが、結果の向上につながったと考えられる。（新体力テスト各学年平均値変化の比較資料あり）
	②聴き合い伝え合える子	１　教員による観察の評価では、２学期と比較して０．２ポイント上昇した。また、児童への質問紙調査では、「イ：できる」と回答する児童が増え、「ウ：あまりできない　エ：できない」と回答する児童が減少し、エ：できないに関しては０パーセントとなった。これらの結果から、６年間を見通した具体的な目標・評価基準の具体的な手立てを各学年で行う取組は効果的であったと考えられる。一方で、「ア：よくできる」と回答が減少していること、「エ：あまりできない」と回答している児童がいることから来年度は、年度当初から計画的に聴き合い伝え合う活動を授業に取り入れ、今年度作成した「話す・聞く学年別到達目標」も活用していきたい。 ２　クラスルームイングリッシュに関しては、３学期から教室掲示を行い、教員・児童ともに意識しやすくなった。
Ⅱ	**①進んであいさつをする子**	・　二学期よりもアの回答率が低くなっていることから、あいさつレベルの提示によって基準が明確になり、自分のことを客観的に見ることで厳しく評価することが出来ていると考えられる。
	②気持ちを考え行動できる子	１　９割以上の児童が、学級内につながりを持ち、学校生活に充実感を感じている。また、自己肯定感は２学期に比べ、多くの学年で上昇が見られる。一人一人を大切にする教育を今後も継続したい。 ２　９割近い児童が、思いやりを持った行動を心がけており、教職員による評価も２学期に比べて肯定的である。否定的な意見も微増している点は見逃せない。
Ⅲ	**①きまりを守る子**	・　アの回答率が高くなっていることから、学級及び委員会等の取り組みの成果が出ていると考えられる。また、エの回答が０％になっていることから、きまりを守ろうとする意識が高くなっていると考えられる。
	②ものを大切にする子	・　アの回答率が高くなっていることから、自分の持ち物を大切にしようとする意識が高くなっていると考えられる。

Ⅱ　子どもの姿の変容

「年度末の子どもの現状」における課題部に下線を付した。

めざす子どもの姿		子どもの現状（取組前の状態）５月中旬の姿	年度末の子どもの現状（取組後の状態）２月上旬の姿
Ⅰ	**①進んで学習に取り組む子**	1　自ら課題を追求できる子どもが増えたが、やはり個人差が大きい。また学年によっては課題の発見・追求が難しいという実態も明らかになった。（英語・授業研究） 2　２回目の体力測定で立ち幅跳び・シャトルランの記録が下がった学年があった。遠くに跳ぶ・長く走るという技能について、課題を残した。（健安）	1　児童の発達段階に応じた指導を通して、児童は自らの課題を発見したり、仲間と協力して解決したりしようとする姿が見られるようになり、個人差についても５月中旬と比較すると小さくなった。（授業研究） 2　全身持久力が弱い。引き続き、運動量の確保や休み時間の外遊びを工夫していくことが必要だと考えられる。（健安）
	②聴き合い伝え合える子	1　学年の実態に応じて、自分の考えと比べながら聴くことができる子が増えた。一方で、そこから話す活動につなげられる子は個人差が大きく、課題を残した。（授業研究） 2　繰り返し使われる表現については、よく聴き、話すことができる子どもが多い。一方で新しい言葉や文には抵抗がある子どもも少なくない。（授業研究） 3　国語科では『言葉のたからばこ』を生かすなどして、いろいろな語彙を用いて自分の気持ちや考えを表現しようとする子どもが増えた。（授業研究）	1　話す活動については、話す型が決まっていたり原稿があったりする場合やペア・グループといった少人数の場では、ほとんどの児童が安心して話すことができるようになった。一方で、全体の場で自分の考えを話すことには抵抗感をもつ児童が依然として多い傾向にある。（授業研究） 2　繰り返し使われる表現については、よく聴き、話すことができる子どもが多く見られた。新しい言葉や文は言葉の意味やデモンストレーションのやり取りの内容を児童に想像させるなど、段階的に慣れさせることで、楽しみながら新しい言葉や文に向き合える児童が増えた。（授業研究） 3　国語科の『言葉のたからばこ』、『漢字の広場』、物語文や説明文での言葉にこだわった授業を通して、いろいろな語彙を用いて自分の気持ちや考えを表現しようとする子どもが増えた。また、３年生以上では様々な教科の中で言葉に興味をもち、辞書を活用する姿が見られた。（授業研究）
Ⅱ	**①進んであいさつをする子**	1　する子もいるし、しない子もいる。他校へ訪問した機会と比べると、来校者に積極的にあいさつする姿は少ない。（地域連携） 2　大人があいさつをすれば、大半の子どもはあいさつをする。（地域連携） 3　自らあいさつをする子も増えたが、全体へは浸透していない。（生指）	・　あいさつレベルの提示によって、あいさつの仕方を意識して行動する児童が多くなった。その上で、自分のあいさつの仕方を客観的に考えて自己評価をするようになった。（生指）
	②気持ちを考え行動できる子	1　多くの児童が自信を持って生活しているが、人間関係等に苦慮し、肯定感が低い児童が少なからず見られる。（人権）	1　多くの児童が、周囲の児童とつながりを持ち学校生活を前向きに送っている。また、人間関係の充実から、自己肯定感の高まりも見られる。その一方で、人間関係を築くことが苦手な児童も少なから

		2　学級の成熟とともに、お互いが気持ちを考えて思いやることができるようになり、トラブルも減ってきた。（人権） 3　意識している子としていない子の差がある。子ども同士で注意し合う姿も見られた。（生指）	ず見られる。（人権） 2　互いを理解することによって、トラブルが無くなり、相手を傷つける言葉も少なくなってきた。しかし、無自覚な差別発言が高学年において聞かれることもあった。（人権） 3
Ⅲ	**①きまりを守る子**	1　安全に登下校しようとする意識が育ち、交通ルールについては、概ね守られるようになった。（健安） 2　項目を把握していない子が多い。ふだんから声掛けしている内容については理解できて来た。（生指）	1　安全に登下校しようとする意識が育ち、交通ルールについては、概ね守られるようになっている。（健安） 2　校舎内を走る児童は変わらずいるが、意識をして行動する児童は増えてきている。（生指）
	②ものを大切にする子	1　振り返りカードに取り組むことで、残さず食べようという意識が育ち、残量が減った。（健安） 2a、b　清掃の仕方はわかってきたが、清掃への意欲は高くはない。（生指） 3　落し物の量は変わらなかった。また持ち物への記名がないため持ち主に届かないことがある。（生指）	1　給食振り返りカードに取り組むことで、残さず食べようとする意識が育ち、残量が減っている。（健安） 2　清掃の仕方については少しずつよくなってきているが、清掃時間の過ごし方には課題が残る。（生指） 3　落とし物の量が減ってきている。しかし、教室内等での落とし物に記名のないものが目立つ。（生指）

Ⅲ　本年度の取組への意見

適切であったという意見には○、改善が望まれるという意見には●を付した。

❶　「６つのめざす子どもの姿」は、取組の目標として適切であったか。

○発達段階に応じた具体的な目標を示すことで、より取り組みやすくなった。

○昨年度を生かして系統性があり良かったです。学年で取り組む内容がよくわかった。

○適切だった。（２）

●年度の初めから「６つのめざす子どもの姿」を掲示し、取り組みを進めていきたい。

【学校運営協議会からの意見】

●めざす子どもの姿は具体的なものが多いが、「気持ちを考え行動できる子」のみ抽象的である。

●「進んであいさつをする子」と「気持ちを考え行動できる子」が高学年になるほど評価が低くなるのが気になる。評価基準が難しくなることや、学年が上がるので、教師の評価が厳しくなっているのではないかと考える。

❷　評価シートの形式や内容は、適切であったか。

〇年間を通して子どもたちの成長が見られるような形式になっているのでよかった。

〇学期ごとに振り返ることで、次学期につながる目標の設定がしやすかった。

〇とてもよかった。

〇適切だった。

●項目が多いため、絞れることは絞っていけると見やすく分かりやすくなるのではないか。

●昨年の意見でもあったように評価項目が多いように思う。また、部会でも偏りがあるので精査してはどうか。

→例えば、部会の数に合わせて４つにするなど。

●評価項目の再検討ができればよいと思う。

【学校運営協議会からの意見】

●シートの項目の表記を見直し、「分析・考察」または「評価・考察」としてはどうか。

●「ものを大切にする子」の取り組み内容が３学期間同じである。２学期の達成状況を踏まえ、３学期の取り組みを設定していくべきではないか。

●「ものを大切にする子」のみ、教師による評価方法と子どもたち同士での評価となっている。評価方法はアンケートとし、そこから分析をしていく方がよいのではないか。

●達成状況の評価の記述に「課題が多い」とある。どのような課題があるのか、具体的な記述が必要ではないか

❸　「教員による観察」と「児童への質問紙調査」による評価は、評価方法として適切であったか。

●「教員による観察」の評価の仕方が難しい。教員間での評価基準の意思統一が必要である。

●教員の評価と児童との評価に差があるため、より具体的な評価基準の設定が必要である。

●教員と児童との評価に差があったのは、評価の基準が教師と児童の間でズレがあるのだと思う。

→児童に質問紙調査を書かせるときに“自分から挨拶ができていたら「できた」、自分からは言わないが言われたら返していたら「どちらかといえばできた」など”具体的に教師が説明して、評価の基準を明確にするとよいのではないか。

●１クラスだけの評価（「児童の質問紙調査」）は適切だろうか。

【学校運営協議会からの意見】

●評価結果が、教師分は学年ごとに見ているのに対し、児童分は全校まとめてとなっている。教師と児童を比較しやすくするには、児童分も学年ごとにまとめ、教師と同じ４件法で数値化して表した方がよい。

●「子どもの評価結果と教師から見た子どもの姿に乖離がある」という記述がある。教師の観察の評価も大事ではあるが、一部の児童の行動を全体の評価とすることはどうだろうか。評価結果は、客観的なデータをもとにすべきである。評価方法の一つに、「教師の聞き取り」を入れるのであれば、「教師と児童のアンケート結果に乖離がある」という記述にすればよい。

❹　研修・指導部会（“縦糸”）と各学年・各学級（“横糸”）による取組は、組織的な取組として適切であったか。

○今年度は評価基準を低中高で系統立てて作成することができた

●評価項目によっては話しにくかった。

●3 年生は、校務分掌上健安部がいなかったため、学年で話し合う時など、少し困ったことがあった。

【学校運営協議会からの意見】

●２学期の課題に、「時間をまもれるようにはなってきたが、放送を頼りにしている姿がある」とあるが、これに対する取り組みがない。放送を頼りにしていても、それで動くことができればよいのではないか。

❺　その他の意見

【学校運営協議会からの意見】

○「気もちを考え行動できる子を育てるために様々な活動に取り組む」とある。子どもたちは、活動の中でいろいろな姿を見せる。子どもたちには、それぞれの友だちのよさにその活動の中で気づいていってほしい。

○２年目の新しい学校自己評価の取組を評価しつつ、来年度は出来る範囲で改良を加えていっていただきたい。

●評価結果より、子どもはできていると考えているが、教師はできていないと考えている項目がある。教師が子どもに、できていないと伝える場が必要ではないか。

●持ち物の管理が苦手な児童が多いようである。あいさつの重要性とともに、ＰＴＡと連携して、保護者に啓発をしてはどうか。